

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.25
AUTUMN 2011



「長恨哥の抄」 絵巻、三巻三軸

目次

●メッセージ

研究対談「隣組の学术交流協定」……………横井 孝・今西 祐一郎 1

●研究ノート

『古事類苑』と『古事類苑データベース』のこと……………相田 満 4

辛亥革命後の楊守敬……………陳 捷 6

江戸の源氏学……………神作 研一 8

●トピックス

第4回日本古典文学学術賞受賞者発表……………10

第4回日本古典文学学術賞講評……………落合 博志 11

第35回国際日本文学研究集会「〈場所〉の記憶—テキストと空間—」プログラム ……12

韓国ソウルでの研究交流……………大高 洋司 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況……………14

研究対談「隣組の学術交流協定」

横井 孝 (実践女子大学文芸資料研究所・所長)

今西 祐一郎 (国文学研究資料館・館長)

※この対談は、8月4日に国文学研究資料館で行われました。



▼今西 昨年、国文学研究資料館と実践女子大学の文芸資料研究所とが学術交流協定を結びました。本日はそれにちなんで、文芸資料研究所の改めでの御紹介とか、そしてまた今後、どのような活動を一緒にやっていくことができるかというようなお話を横井所長から具体的にお聞きしたいと思います。よろしくお祈りします。

▼横井 よろしくお祈りします。文芸資料研究所は文字通り「研究所」ではあるのですが、本来の「研究」とは別に、周囲からの要請もあってのことですけれども、最近では、年に2回の展覧会と、そのほかにも各種イベントを行うという形で社会還元していこうという方向性をもって運営しております。

「研究所」の活動としては、去年度は、実践女子大学が所蔵している黒川文庫の散文の部分一特に「物語の部」なのですが、それについての総合目録(『実践女子大学図書館所蔵 黒川文庫目録【新版】』2011年3月刊)を作ったところ。古いの

(旧版、1967年刊)はあるんですが、専門の書誌データが欠けているし、その後の追加書目もありますので、新版をそろそろ出すべきだろう、まだまだ疎漏があるだろうけれども、識者の御教示をいただくよすがにしよう、という趣旨で目録をつくり直しました。

実践女子大学には他にも山岸徳平先生旧蔵の山岸文庫ですとか、それから渋谷に実践女子大学があったところから現在まで蓄積を続けている常磐松文庫などがありますが、「研究所」が目録を作らなければならないのですが、まだ黒川と同じ段階には達しておりません。今後、資料館の御教示をいただいたりして、蔵書の整理を進めてまいりたいと考えております。

▼今西 私たちは中央線の駅でいうと、立川と、その1つお隣の日野、いわば隣組のような御縁があるわけですけれども、実践女子大学という、今ご紹介いただいた山岸徳平先生の文庫とか、そしてその後、阿部秋生先生が教授に就任されたりといった、「源氏」に関する関係の研究や蔵書の一大中心地であるといった印象を持っています。特に山岸先生旧蔵の明融本は、3年前の当館における「源氏千年紀」の源氏物語展示のときにも、拝借した貴重書です。

▼横井 私どもは、資料館が戸越にあった頃からお世話になっておりますけれども、今西先生ご本人にもいろいろ教えて頂いていますよね。たとえば

「源氏」でいえば、先生が前にいらした九州大学は古活字版「源氏」をお持ちで、実践女子大学蔵の古活字の位置づけについては、先生にぜひ教えていただきましたが……

▼今西 いや、写真をいただいたきり、まだ研究まではしていないのですが。

▼横井 古活字本は、手元に所蔵されていながら、ほとんど検討してきませんでしたね。先生から指摘されて、身近にあるのが第1類に属する版なのだ、ということで初めて貴重さに気がついたという体たらくです。文芸資料研究所の『年報』に報告しておりますけれど、先生のご教示で書かれたものだったのではないのでしょうか。

山岸文庫については、これも目録化に向けて整理を進めてはおりまして、まだデータを整理しないとけないのですが、エクセルデータにしているところです。いつとははっきり申しませんが、これもさほど遠くない将来には公開できるようにしたいと考えております。

常磐松文庫についても、「源氏」とか、例の『紫式部集』なんていうのもございます。それも一部分は整理が済んで、データなんかも開示できる状態であると思います。

▼今西 所蔵しておられるだけでなく、目録作成、データ整備など、精力的なご活動は、学界にとってもありがたいことです。

▼横井 黒川文庫の目録をつくった

というも、実は別に目標がありました。ほかの大学、研究機関にある黒川文庫とあわせて、黒川家の蔵書の形成過程というのを見ていきたいと思っております、本の伝来が記された識語を集成した目録をつくりたい、というのが第1弾だったんです。ほかの大学との共同研究ということで考えてはみんですが、なかなか難しい。例えば、ノートルダム清心女子大学、明治大学、慶應義塾大学、持っていらっしゃるどころの研究者の方は皆さんお忙しいし、私どもも先ほど申し上げたように、これだけやっているわけにはまいりません。やはりどこか基点というか核というか、そういう「研究の場」がないと結集しづらいのではないか、こういうときに資料館にお役に立っていただけるとありがたい、と思うのですが。

▼今西 今、蔵書形成というお話が出ましたけれども、国文学研究資料館では今年度から新たに「近世における蔵書形成と文芸享受」（代表 大高洋司教授）という基幹研究を開始したところなんです。それは黒川文庫を想定した研究ではありませんが、40年近くにわたって全国各地の神社、寺院、公私の文庫の書誌調査をさせていただいてきた国文学研究資料館の中には、それらの文庫がどういう経緯をたどって今日の姿になったのかという事に対するなみなみならぬ関心が共有されてきていると思います。そういう様々な文庫の蔵書形成の過程というものを研究対象にしようという機運はあります。そういう意味で、今後、黒川文庫の総合的研究といった形で、基幹研究とは別に、文芸資料研究所との共同研究として外部資金を申請するのも一案ですね。

黒川文庫研究における目の付け所は、たとえばどういう点でしょうか。

▼横井 識語などを見ていると、どういうふうなところから仕入れてきたかというのは、ある程度見えてきます。たとえば屋代弘賢ですとか清水浜臣などという名前が出てきます。それから蔵書印ですね。阿波国文庫や岸本由豆流の印記がありますね。

▼今西 今回の黒川文庫目録にも、巻末に蔵書印の一覧をつけておられますね。

▼横井 「印譜」は今回どうしても付録にしたかったものです。所蔵者の不明な印記が少なくないので、なんとかしたいと思うのですが、識語と一緒にもっと調べなければいけません。その作業のためにも、可能であれば、資料館の海野圭介先生に中心になっていただいて、あとはノートルダムの新美先生など、そういう方たちに集まっていただいて、なるべく早く、これでもできればという但し書きですが、来年度あたりから勉強会ができればいいな、と思っているんです。

▼今西 有意義な共同研究になりそうですね。

▼横井 「近代初頭期における蔵書形成」などというテーマはどうでしょう。

▼今西 近代初頭ということになりますか。

▼横井 はい。もちろん春村からなのかもしれませんが、やはり大体は真頼からで、実際に真頼、真道の所蔵本が中心になっていますから、やはり近代初頭というべきなのでしょうね。そのあたりの時代の研究はまだ立ち後れているんじゃないでしょうか。資料館は、「研究」を通して研究機関を糾合するのに、まさに中心にある、という



ことでありがたい機関だと思うのですが。

▼今西 そうです。そういう共同研究の拠点として、館外の研究者の方々に利用していただくというのが、大学共同利用機関法人としての国文学研究資料館の使命でもあると考えています。教員それぞれの個人研究もさることながら、共同研究の推進ということが、当館の教員に課せられている重要な任務です。

▼横井 でも、こういうことをやっていざいざと、派生するものがいっぱいあるんじゃないでしょうかね。

▼今西 いろいろ新しい問題が出てくると思いますが、それらがばらばらではなく、相互に関連しながら展開されていくというのが、望ましい姿だと思います。

▼横井 例えば、今年ですか。陽明文庫の……

▼今西 平成21年度に始まった3年計画の特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（代表 中村康夫教授）は今年が最終年で、その総括として10月から国宝を含む特別展示と、陽明文庫長の名和修先生の連続講演会を開催します。

▼横井 楽しみですね。

▼今西 ただ、準備する側としては、

国宝級の展示というのは、展示環境や警備の問題で、通常の展示とは違う、細心の心構えが求められます。

▼横井 名和修先生はいらっしゃるんですか。

▼今西 連続講演だけでなく、展示作業においても名和先生じきじきに御指導いただくことになっています。

▼横井 展示する物はまだオフレコですか。

▼今西 いや、すでに最新の国文研ニュースNo.24に名和先生と、当館の中村機関研究員による紹介が載っています。ご覧ください。見る人を惹きつけるのは、まず『御堂関白記』でしょう。

▼横井 なるほど『御堂関白記』ですか。国宝中の国宝ですね。

▼今西 それから、『類聚歌合』と『十卷本歌合』です。

▼横井 あれが出るというのはめったにないこと……。

▼今西 ただ場所が都心から離れているので、どのぐらい人が見に来てくれるかと、ちょっと気になります。

▼横井 私どものところだったら、当然、学生を連れてこないといけないところですね。一駅ですから。

▼今西 ぜひ、講義の一環としても活用してください。そのほかに、『倭漢抄』に『大手鑑』と、何とも豪華です。

▼横井 ほう。2003年10月に同志社大学で中古文学会の大会が開かれたときに、陽明文庫を開いていただいて、お蔵の中で『大手鑑』を見せていただいたことがありました。

▼今西 今回の陽明文庫展は、単に展示だけではなくて、先ほども申したように、陽明文庫長の名和先生の連続講演会が5回にわたって10月から12月にかけてあります。また、それに

先立ち、事前講演会と銘打って、9月19日に渋谷の東京ウィメンズプラザでも陽明文庫についての名和先生の講演会が行われることになっています。

ところで、文芸資料研究所での今年のお仕事は、どのような予定ですか。

▼横井 文芸資料研究所としては、今年5月に図書館所蔵の内田百間の書簡集を出しましたし(『多田基旧蔵内田百間書簡・写真集』実践女子大学優品録3)、あらたに図書館の所蔵になった梶井基次郎『檸檬』の草稿がありますので、それに関する企画を建てているところです。その前に、今年の秋にはまた『源氏物語』と奈良絵本を集めた展覧会をしますので、その準備をしているところです。

これは前々から今西先生とお話しているんですけども、資料館は奈良絵本もいい物をお持ちですし、それと実践の持っている物とか、近隣の機関や個人の所蔵本などを糾合するような形で展覧会を開けないかな、というふうに前々から申し上げていますよね。

実践女子大学が所蔵する古典籍

を実践だけで展覧会をするというのは、環境も施設も限界がありますので、ぜひこれは資料館とタイアップする形で共同研究とともにやっていきたいと思っています。

▼今西 奈良絵本といえば、目下当館では、小林健二教授を代表者とする「在米絵入本の総合研究」という特定研究を、科学研究費補助金を受けて継続しています。これはスパンサーコレクション、パークコレクションなど、流出して米国にある絵本、絵巻、絵入版本等の総合調査とその研究ですが、9月にはコロンビア大学との共催で、ニューヨークで国際シンポジウムを開催します。こういう事業が一段落したら、今度は、「在米」ではなくて「在立川・日野 奈良絵本展示」といったことに共同で取り組むのは、いかがでしょう。

一昨年でしたか、軸装の新出河内本切を数点お借りして、国文学研究資料館蔵のものと合わせて、展示をもり立てていただきましたが、今後もさまざまな形で、共同研究、共同展示を行っていききたいと思います。

本日はどうもありがとうございます。



左：今西館長 右：横井所長

『古事類苑』と『古事類苑データベース』のこと

相田 満 (国文学研究資料館准教授)

『古事類苑』の全文データベースを特色づけていることに、

- ①縦書本文表示の HTML
- ②『古事類苑』 収載図版の表示
- ③外字の作成と画像化表示
- ④異体字検索

などが挙げられる。

洋装本 51 冊、和装本 350 冊を数える『古事類苑』全 1,000 巻は、完成後約 1 世紀が経つ今なお日本最大規模の地位を保つ百科事典である。

『古事類苑』は 1896 年 (明治 29) から刊行が始まり 1913 年 (大正 2) に全冊が完成、翌 1914 年に全冊目次と五十音順索引を収める索引巻が完成する。五十音索引完成までの 19 年間は、関連する事項の前後が通覧・通読されて、明治・大正年間の学芸に甚大な影響を及ぼしていたのである。五十音順索引の登場は、検索に便宜を与えはしたが、現代における電子辞書の登場と同様、知識の使われ方が断片化していくという、辞書検索者の情報リテラシーに根底的な変化を及ぼしていたと考えられよう。

そもそも、『古事類苑』の内容は、引用文だけで構成される叢書の印象を与えがちだが、標目の配列は決して無秩序ではなく、綱領と標目の関係は、あたかも論文と、その考証論拠となる参考文献との関係が保たれた構造となっており、いわば、和漢の知識体系が融合した下地に、解説を主とする西洋型百科全書の方法も採り入れたハイブリッドな構成と意義付けられるものとなっている。そのため、論文と注の関係のように、冒頭の解題と膨大な引用文とで整合性が保たれており、本来の読まれ方は、各部立毎に組まれた見出しを目安に探し当てた情報に関連する知識を「通読」して、当該の事項だけでなく、関連する知識体系全体を「習得」することを志向する類聚編纂書としての編纂方針が貫かれた書物であったのである。(このことは見本版『古事類苑』[図1]の分析により判明している[相田『和漢古典学のオントロジ』第4章、勉誠出版,2007])

しかし、引用文ばかりの百科全書が読書に不向きな性格を持つことについては、つとに平安時代に博学にして著名な、悪

左府の異名を持つ藤原頼長 (1120-1156) が『御覧』138 巻を読破するも、記憶に残る所少なく、その読書行為が不毛であったことを悟った話が知られている (『台記』 康治 2 年 9 月 29 日条 [1143 年 11 月 7 日])。その際、藤原友業から「御覧」は必要なときに参照するものだとの助言を得ている。古典類書 (百科辞典) は検索に適した構造にはなっているが、その引用文の記述は、節略あるいは摘録に係る部分が多かったため、通読に適さないという欠点があった。

ところがその一方では、宋の太宗 (939-997、在位 976-997) が『太平御覧』を編纂させ、1日3巻読み続けた故事もあるのである [『玉海』 54 芸文・太平御覧]。頼長が読破しようとした「御覧」が『太平御覧』だったか『修文殿御覧』だったかについては説が分かれるため、一概には比べられないが、『古事類苑』本文の引用方法が、基本的に文章を恣意的に省略する節略を行わず、ひとまとまりの引用でまとめられていること (あまりにも長文の場合には中略・後略はあるが)、標目毎に集められた引用を総括する綱領が配慮されている点で、『古事類苑』登場当初の読まれ方は、各部立毎に組まれた見出しを目安に探し当てた情報に関連する知識を「通読」することによって、当該の、および関連する知識体系全体を「習得」することを志向する編纂方針であったと位置づけることが出来るのである。

当初の刊行形態であった和装本は、分冊されているので一冊あたりの重量はきわめて軽量で、しかも和紙で作られているので丈夫なため、幾度もの再読に耐え得るという点でも、長期間の使用にも耐えることが出来た。こうした条件も通読という観点で考えるならば、最適だったろう。

ところが、全巻の完結後に索引が作成されてからは、五十音索引も頻用され、検索された一部の事項だけが参照されるという使われ方が可能になり、一般の使われ方も索引から引くという形へと変化した。それとともに、書型も分冊され携帯に便利な和本から大型洋装本へと変わり、書棚で背表紙を見ながら適宜該当の冊子を抜き出しては繙く使われ方が主流になった。しかも、和装本の作成に比べて、洋装本の作成コストは圧倒的に安価である。さらには、その洋装本も縮刷が施された普及版の登場に伴い、『古事類苑』の享受形態は、「通読」方式からますます縁遠くなった。その意味で、『古事類苑』における縦書 HTML の構築は意義のあることと言えよう。で



【図1】 見本版古事類苑 (無窮会図書館蔵)

できれば、通読にも挑んでもらいたい所である。

しかし、現在(2011年8月)、縦書HTMLをサポートするブラウザは、Internet Explorer(マイクロソフト)と日本発のブラウザLunaScape(Lunandscape株式会社)に限られる。そもそも、世界で縦書の書記形態を採用する国がモンゴルと日本のみという少数派となってしまう現在、世界規格における縦書のサポート状況はきわめて芳しくない。しかし、今後主流となっていくものと思われる携帯・電子タブレットに対応する電子書籍の規格においては、縦書をサポートする形式であることを強硬に主張した結果、EPUB 3.0の策定を見ることができ、日本語への正式対応と縦書もサポートされるようになった。さらに、筆者も委員として参加している書籍等デジタル化推進事業(外字・異体字が容易に利用できる環境の整備)において、電子タブレットや携帯端末に搭載されるコンテンツ普及の妨げとなる異体字・外字を共有する組織の立ち上げ準備が進められている。

これはガラパゴスと揶揄され、このままでは日本の電子産業が壊滅に瀕することに危機感を抱いて、電子出版の課題や制度について検討する、総務省、文部科学省、経済産業省の3省合同による懇談会に基づく提言により立ち上がったプロジェクトの一部である。趣旨が一般社会に普及するコンテンツという名目の下にあるため、学術用資源は、とかく特殊なものとして敬遠・阻害されがちではあるが、『古事類苑』は前近代において日本人が著述した典籍中に現れる漢字が明朝体の活字字形で大量に収録されている点でも格好のサンプルである。『古事類苑』の全文データベースの構築の過程において発生し、作り続けている『古事類苑』の外字画像も、試料として採択される日が来ることを期待する次第である。

ところで、『古事類苑』に引用される本文の正体はどのようなものだろうか。

公開データ中の3部に使用される典籍の引用頻度は[図2]の通り。六国史などの引用頻度が目立つが、そもそも編纂時に国史大系のような通行の活字本は無く、版本が使われていたものと思われる。

文部省編輯局長大書記官西村茂樹による1879年[明治12]3月8日付「古事類苑編輯ノ儀伺」の建議(本文は索引巻「古事類苑編纂事歴」に収載)によると、必要書籍は数千巻を要するも、浅草文庫(東京国立博物館の前身)・東京府書籍館(国会図書館の前身)蔵書でまかない、経費を省いたとある。おそらく、それらの典籍が使用されたものと

思われるのだが、実際の引用文には編纂者の校訂の跡が伺える。確認のため、諸本の

天部 333p 1912件 頻度 書名 308種	歳時部 1490p 5782件 頻度 書名 919種	地部 4202p 17059件 頻度 書名 1858種
126 三代實録	170 元秘別録	748 續日本紀
93 萬葉集	131 延喜式	647 延喜式
92 日本紀略	125 百練抄	627 日本書紀
75 續日本紀	106 書言字考節用集	495 倭名類聚抄
73 日本書紀	105 倭訓栞	490 香妻鏡
72 香妻鏡	98 續史愚抄	384 萬葉集
65 類聚名義抄	96 一代要記	246 三代實録
50 百練抄	78 萬葉集	234 倭訓栞
49 倭訓栞	77 皇年代略記	212 書言字考節用集
45 倭名類聚抄	72 東都歳事記	204 日本地誌提要
41 扶桑略記	65 中右記	197 和漢三才圖會
34 倭注倭名類聚抄	64 西宮記	191 伊呂波字類抄

〔図2〕『古事類苑』天・歳時・地部の引用文献

全貌を把握でき、その全貌を把握できる引用文を採り上げて確かめてみよう。

一つめは『茶譜』である。これは、茶室研究で頻繁に名が挙がる書で、諸本は国会・静嘉堂・内閣・岩瀬本の写本のみである。比べてみると、次のような例がある。

一揃^①云ハ、極別儀ノ^②揃クツゾ揃ヘテ悪キ詰茶二用、…(中略)
…極ノフルイカスナリ、又吟^③云モ有・之ハ、…(中略) …之ヲ
揃出スヲ云也。 (『古事類苑』遊戯部茶湯二・茶品、p538)

※校異 ①揃：倫[国静内岩] ②フ：ワ[岩]
③(ナシ)：味悪シ[岩]

校異①は『古事類苑』では「揃」(エラフ[名義抄]・エラム[広益玉篇大全])と「選ぶ」意味の字に改められるが、『茶譜』諸本の「倫」にはそのような訓はなく、意味も異なる。内容的には『古事類苑』本文の方が相応しく、校訂されたものと考えられる。

もう一例、『古事類苑』方技部「観相」(人相占い)所引の『神相全編正義』は、石龍子法眼の改誤付訓注による文化2年[1805]刊本のみだが、引用に際しては、原本の古字を通行字に改めている[図3]。



左：[図3] 上段原本・下段翻刻字 右：[図4]『古事類苑』再版時の修訂箇所(左・初版・地部27・664頁、右・再版以降)

このように、『古事類苑』には編纂者による独自の校訂本文も含まれることが了解されよう。確かに『古事類苑』自体の誤謬も稀々にある一方で(もちろん修訂に努めてはいるが)、『古事類苑』自体も重版時に訂正された所もある[図4]。いわば『古事類苑』自体が独自本文を擁する幻の流布本といえるのである。しかし、それが近代以降の研究に及ぼした影響は甚大で、しかも震災・戦禍を経た現代においては、『古事類苑』のみに遺存する本文が存在する可能性も高い。

その点でも、『古事類苑』の全文データベースを構築する意義は大きい。(字数の都合上、フォーラムでの発表内容を一部差し替えさせていただきます)



〔図5〕『古事類苑』全文データベースの縦書表示

辛亥革命後の楊守敬

陳 捷 (国文学研究資料館准教授)

本年十月は、中国において辛亥革命が起きてからちょうど百周年の節目に当たる。まさしく百年前において、中国数千年の歴史の中でも重要な出来事が発生したのである。四川で勃発した鉄道国有化反対運動が引き金となり、武漢駐在の軍隊がクーデターを起こしたが、それはまもなく全国規模にまで拡大し、二ヵ月後に全国の十五の省が独立を宣言し、四ヵ月後には清朝最後の皇帝である溥儀が退位することとなった。これは中国における封建王朝の終結である。この天地転覆とも言えるほどの政治変革は中国社会に大きな変化をもたらし、また多くの中国人の人生にも大きな影響をもたらすこととなったのである。このような社会変革の中で、伝統的な中国の知識人たちはどのような体験をし、また、それにどのように対応したのだろうか。ここでは、辛亥革命の発祥の地である武昌において革命を経験した、清末の著名な歴史地理学者・蔵書家である楊守敬の回想や書簡資料を通して、激動する時代の中で、蔵書の保護と研究書の出版のために彼が行ったさまざまな努力を検討し、辛亥革命後の楊守敬の境遇、心情、特に友人の羅振玉との間で生じた、異なる政治立場の選択による友情の亀裂について述べてみたい。

楊守敬は清末の著名な考証学者であり、とくに歴史地理・金石文字・版本目録などの分野において多くの業績を残している。1880年に来日し、帰国までの4年間の滞在中において、清朝金石学の最新の成果および多くの拓本資料を日本に紹介し、明治時代の書道界に大きな影響を与えた。また、清国第二代目の駐日公使である黎庶昌とともに『古逸叢書』を編刻すると同時に、日本にあった大量の古写本、中国古刊本および和刻本漢籍を蒐集し、当時の中国の学界を大いに刺激したこともよく知られている。帰国後、彼は学問に専念すべく、学校の教諭などの閑職を勤める一方において、古典籍の校勘・出版並びに書誌学、金石碑帖や『水経注』の研究・著述を続けた。辛亥革命が勃発した1911年には、彼は歴史地理学の力作・大型な歴史地図集、『歴代輿地図』の出版に取り組んでおり、すでに元代までの部分が完成していた。

武昌で起きたクーデターは、楊守敬の生活を時代の激動の波に巻き込むこととなった。事件当時、武昌の家にいた彼は、蔵書のことが心配で、避難しないつもりでいたが、銃をもって家に入ってきた兵士に脅迫されたため、結局、蔵書や一切の家財を

残したまま上海へ避難することとなった。上海では、一家の生活費を捻出するため、日本人の注文に応じて書を書いたり、有力者のために古物を鑑定したりなどしていたが、それと同時に、武昌に残っていた蔵書の保護と、それらを比較的安全な上海に運び出すために、様々な対応策を講じてもいた。彼は数度にわたり、新しい国民軍政府の湖北都督となった黎元洪の軍事顧問を務めていた日本人、寺西秀武に書簡を送って、黎元洪に働きかけてもらい、何とか自宅に残った蔵書に保護の札をつけてもらうことができた。しかしながら、戦闘が続いていたため、蔵書を自宅から持ち出すことは極めて困難であり、とくに漢陽が陥落した後においては、もし清朝政府の軍隊が武昌城内に入ったならば、黎元洪の保護命令も効果が無くなるため、新たな対策を考えざるを得なくなったのである。日常生活に必要なものや書物を持ち出すために、楊守敬は三度までも息子たちを武昌に向かわせたが、ことごとく失敗に終わった。その後、書道の研究のために彼を訪ねた日本人、水野疎梅が、武昌の自宅に日本国旗を掛けさせれば、清軍からも保護されることになると提言し、武漢の日本領事館員と相談するために、水野自らが漢口に赴くこととなった。また、楊守敬は上海に来た寺西秀武と相談し、武漢の状況に詳しい彼に色々アドバイスしてもらったようである。楊守敬と寺西秀武との関係は今日まであまり知られてこなかったが、現存している楊守敬から寺西に宛てた書簡によって、当時の状況を多少とも明らかにすることができる。

寺西の回想録によれば、彼が上海に向かった目的は、黄興と面会して南北講和について協議することにあった。そのねらいは、袁世凱の代表である唐紹儀を革命軍に参加させることであり、拒否された場合には、寺西が彼を暗殺するというものであったが、日本政府から、共和政体の中国よりも、君主立憲国を望んでいるということを知られたため、計画を放棄して漢口に帰ることとなった。このような切迫した状況の中でも、寺西は楊守敬の求めに応じて、始めは楊守敬の息子たちとともに武昌に行くことを承諾し、その計画が楊守敬の息子の都合で変更された後も、彼らの武昌での行動に対して様々な援助を与えていた。

寺西や水野などの日本人や日本領事館の協力及び地方政府の有力者の援助により、楊守敬は1912年になって、遂に武昌の自宅にある蔵書を上海に運ぶことに成功した。しかしながら、楊守敬の家財と蔵書はこのわずかな間に、大きな損失を被って

いた。武昌城外の別荘に収蔵されていた医学書や『經典釈文』などの版本および一切の家財道具が失われてしまい、自宅において保護を受けていた蔵書も番人が不誠実だったために、半分ほどが紛失してしまっていたようである。その上、上海の寓居が狭かったため、膨大な書物の置場所を探さねばならなかった。この頃の書簡において、楊守敬が初めて書物を売却したいという意向を示していることから、生活のために、長い間大切にしていた蔵書の売却を始めていたことが窺えるのである。

革命の中で家財の多くを失ってしまった楊守敬は、その後、主として揮毫および古書や拓本の鑑定などで一家の生活を支えていた。七十四歳となっていた彼はすでに体の衰えを感じ、存命中に、長年手掛けてきた大著『水経注疏』を完成することと、それまでに執筆していた著書を出版することが大きな課題となってきた。弟子の熊会貞とともに『水経注疏』の原稿の校訂に励むと同時に、王先謙、羅振玉、李盛鐸などの学界に影響力を持つ知人たちに次々と書簡を送り、予約出版の呼びかけを依頼している。一方で、彼は梁啓超や、副大統領となった黎元洪などの政界の要人にも書簡を送り、完成した『歴代輿地図』や『水経注図』などを大統領に進呈し、各省の学堂において地理の教科書として採用してもらいたいと申し入れ、その収入によって『水経注疏』を出版することをもくろんでもいた。しかしながら、羅振玉・王先謙らには彼を助けることができず、黎元洪や梁啓超も出版費用としてそれぞれ二百円を援助するに留まっている。そのような中、1914年に黎元洪は楊守敬に書簡を寄せ、大統領の顧問となることを依頼してきた。もし引き受けてくれれば、政府の資金で楊守敬の著書を印刷し、また、その蔵書を北京に運ぶとの条件を黎元洪は承諾していた。一日も早く念願をかなえたいとあせっていた楊守敬は、ようやく『水経注疏』の出版に向けて一筋の光明を見出すことができたのである。

ちょうどこの頃、革命が起きた後に京都に亡命した羅振玉が日本から一時帰国したため、北京に向かう準備をしていた楊守敬は、再び日本へ向かう羅振玉を船まで見送りに行った。しかしながら、羅振玉は楊守敬の行動には反対であり、長年親交を結んできた二人の間に、異なる政治的立場の選択によって深い亀裂が生じてしまったのである。結局、楊守敬は羅振玉の強い反対に遭いながらも予定通り北京に向かい、二人はその後二度と会うことはなかった。

その後、北京に移住した楊守敬は羅振玉に書簡を送り、辛亥革命以後の避難生活と『水経注疏』の出版をめぐる絶望的

な状況とを振り返りつつ、著書の刊行を願って北京に赴いた事情について切々と説明した。羅振玉の自分に対する冷たい視線を感じつつも、その書簡においては、今の世において、自分の学問の価値を理解してくれるものは羅振玉と湖南の王先謙の二人しかいないと嘆き、私の人格を軽蔑しているとしても、私の学んだものことだけは考えてもらいたいと述べ、最後まで羅振玉に序文を依頼し続けているのである。

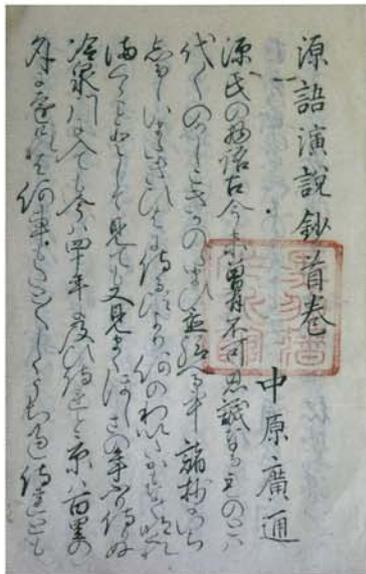
この書簡が記された後ほどなくして、第一次世界大戦が勃発し、ドイツ領だった青島が日本軍に占領された。政局は一変し、政府の資金によって『水経注疏』を出版することは不可能となり、楊守敬の希望は再び裏切られてしまった。彼は王先謙などの古くからの友人と相談して、出版費用の比較的安い永州における自力での刊刻を試みたが、その実現を待たずに1915年1月9日に北京で亡くなっている。

楊守敬はかつて、日本で入手した秘籍を刊刻することこそが自分の人生における最大の願いだと友人に告げたことがある。霍山県知事などの実缺、つまり県知事などの実務を伴う仕事に赴かず、学校教諭などの閑職に終始したのも、学問に専念したかったためである。世の中の富貴、名声と無縁ではあるが、自分の金石学、版本目録学および『水経注』に関する研究は必ずや後世に残る仕事になるだろうとの彼の自負の中に、自分の人生に対する誇りがはっきりと示されている。しかしながら、彼の学問への強い自負心と誇りは、この激動の時代においては、あまりにも無力であった。彼は多くの中国知識人と同様に、時代の大波に巻き込まれ、政治的な立場を選択するようにせかされており、また、そのやむを得ない選択によって、親友からも疎外されることとなってしまったのである。

王国維は『雪堂校刊群書叙録』の序文において、古典籍の蒐集・校訂と出版を、中国近代の学術が盛んになった原因として挙げており、その分野における羅振玉の業績を絶賛している。しかしながら、近代における古典研究を考える際には、国外に散佚した古文献を蒐集し、その特別な価値をいち早く認識した楊守敬の功績も認めなければならないであろう。そのような意味において、辛亥革命に際して異なる対応を選んだ二人は、革命自体に対しては抵抗があったとしても、いずれも中国における近代的な学術の成立に大きく貢献したと言えるであろう。激動の中国近代社会を生きた二人は長年にわたり、様々な立場から批判を浴びてきたが、以上のような彼らの体験は、ある意味において、近現代における中国知識人の典型と見なすことができるのではないだろうか。

ては、自筆の『中院通茂日記』や、京都大学附属図書館中院文庫に所蔵される数種の『源氏聞書』によって、ひととおりの実態を知ることができるものの、総論めいた内容を持つ『源氏物語伝来書』との直接的な影響関係は今のところ確認されない。

さてここで、もう一つの源氏注釈書、石野広通がものした『源語演説鈔』に触れなければならない。この書は現在、三本の伝本が知られているが、特に大田原市黒羽芭蕉の館現蔵の一本は、藩校作新館の旧蔵にかかる広通自筆本であり(松野陽一「(翻刻)石野広通『源語演説鈔』」〈国文学研究資料館『調査研究報告』13号、1992・3〉)、『伝来書』の広本とも見るべきもの。全部で23条から成り、中には、『伝来書』には見出されない源氏講釈の「講談日数」を記した条が含まれるなど、興味深い内容を持っている。



『源語演説鈔』巻頭 (芭蕉の館蔵)



同・外題

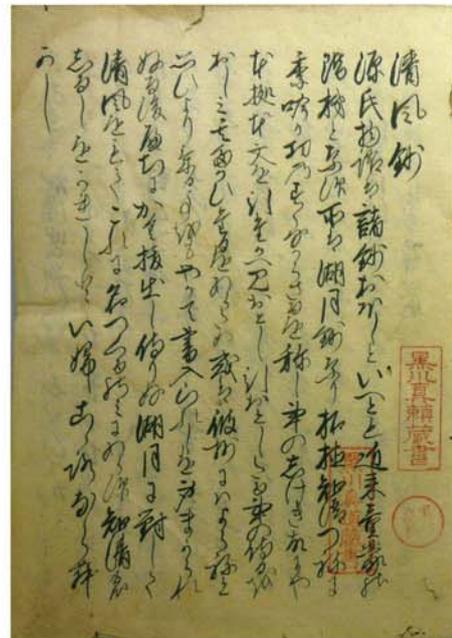
ところで、先頃、佐藤悟氏より恵送された黒川文庫目録の「新版」(実践女子大学、2011)に、「清風鈔」なる一書が掲載されていることに気づいた。この書は、柘植知清の所説を中原広明すなわち石野広通が記録したもので、本書こそ、かつて松井幸隆が講釈した中院の「朱入り源氏」の、その「朱入り」のさまを抜書きした書物なのであった。10冊本、およそ400丁に及ぶ大冊ゆえ、完読にはもう少し時間がかかるが、広通の『源語演説鈔』への階梯を示唆し得る本として大いに注意すべきだと思う。

* * *

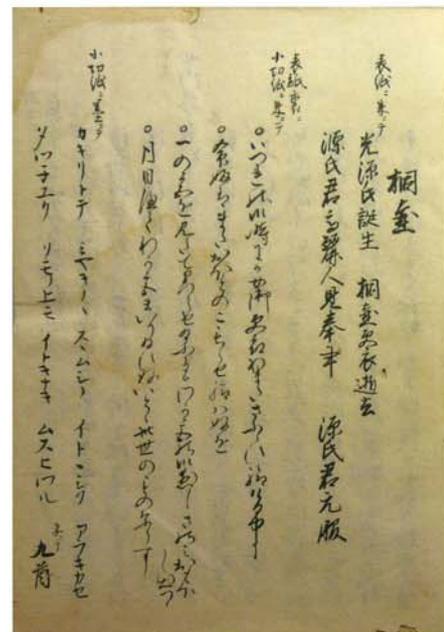
従来、源氏研究は、延宝元年跋刊の『湖月鈔』あたりを境として、堂上から地下へと徐々に移行し、さらに下って宣長の出現とともに国学系の注釈へ展開していったとする見取り図(文学史的理解)が定着している。『伝来書』にし

ても『演説鈔』にしても、国学系の注釈書に比べれば新しい解釈や見解は少ないけれども、師資相承の穏やかな時代の風と精神性が看取できて貴重であり、江戸の人びとの古典受容を考える上では、このような二条派系の注釈書による〈知〉の基盤整備の重要性にもっと目を向ける必要があるのではないかと重言して、このささやかな発表を終える。

〔付記〕図版の掲載を許された東海大学付属図書館・大田原市黒羽芭蕉の館・実践女子大学図書館に、深く感謝いたします。



『清風鈔』序頭 (実践女子大学図書館蔵)



同・本文巻頭

第4回日本古典文学学術賞受賞者発表

日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が主催していた日本古典文学会賞を継承し、若手研究者の奨励、援助を目的として当館賛助会に設置された賞です。

第4回日本古典文学学術賞は、平成22年1月から12月までに公表された、40歳未満の人の日本古典文学に関する論文又は著書を対象として、過去の受賞者（日本古典文学会賞受賞者も含む）及び選考委員から推薦された対象者について、論文又は著書を選考委員会で審議しました。

審議の結果、第4回の受賞者を金時徳氏（高麗大学日本研究センター HK 研究教授）に決定し、平成23年9月2日（金）にパレスホテル立川（立川市曙町）で授賞式を開催しました。

授賞式では、選考委員会の横井孝委員長（実践女子大学教授・文芸資料研究所所長）から、選考の経緯について報告があり、その後、選考委員会を代表して落合博志委員（国文学研究資料館准教授）から受賞者の業績について講評がありました。授賞式の後、引き続き、同ホテルで記念パーティーを開催し、受賞者を囲んで歓談いたしました。



横井孝選考委員会委員長



落合博志選考委員



受賞者金時徳氏

第4回日本古典文学学術賞講評 金時徳氏 『異国征伐戦記の世界—韓半島・琉球列島・蝦夷地—』

金時徳きむしどく氏の著『異国征伐戦記の世界—韓半島・琉球列島・蝦夷地—』（平成22年12月笠間書院刊）は、日本と朝鮮・琉球・蝦夷の間で行われた戦争—日本側の言葉で言えば「征伐」—を題材にした、主に江戸時代における諸文献を対象とする研究書である。

全体は序論と結論を除き大きく二部に分かれ、第一部即ち第一章「朝鮮軍記物の研究」では、豊臣秀吉の朝鮮の役（壬辰戦争）を扱った、いわゆる朝鮮軍記物について総合的に考察される。この章は本書のほぼ半分を占めており、本書の中心的な部分とすることができる。

すべて8節から成る第一章において、金氏は壬辰戦争に関する日本の文献を、寛永期刊行の『太閤記』から天保2年刊行の『征韓偉略』まで、またジャンルの的には通俗軍記・伝記・講談本・絵本読本・史論等に至るまで網羅的かつ詳細に検討し、それぞれの文献における叙述姿勢の特色、人物のイメージの相違などについて分析している。特にその中で、明末期に成立し江戸初期に日本に将来された諸葛元著『両朝平攘録』・茅元儀著『武備志』や、壬辰戦争当時の朝鮮の高官であった柳成竜りゅうせんとんの著で、江戸前期には日本に将来されていた『懲愆録』『西厓先生文集』を参照することにより、壬辰戦争に関する日本の文献の記述に段階的な変化が生じたこと、一方その受容・利用のあり方が文献によって異なっていることを具体的に示した点は重要である。諸外国の脅威による危機感が高まった幕末期に、明をも征服しようとした秀吉の企図が賞揚されるようになる、との指摘も興味深い。総じて本章の成果は、金氏の大学および大学院における指導教授である崔官ちえくわん氏の研究を受け継ぎつつ、更に深化の歩を進めたものと言えよう。

第二部に移り、第二章「琉球征伐の言説と朝鮮軍記物」では、琉球とその征伐に関わる文献のさまざまな問題が論じられる。特に絵本読本『絵本琉球軍記』について、挿絵や挿話等における『絵本太閤記』の影響や、征伐を正当化する論理に見られる朝鮮軍記物との共通性を指摘し、琉球軍記物と朝鮮軍記物の融合を述べた点が注目される。

第三章「神功皇后・百濟救援戦争の言説と朝鮮軍記物」では、神功皇后のいわゆる三韓征伐など、神話時代や古代・中世の、創作を含めた朝鮮との合戦を扱った作品（三韓軍記物）に、『朝鮮軍記大全』『絵本太閤記』等の朝鮮軍記物が利用されていることが明らかにされる。時代の異なる合戦の記述において、壬辰戦争に関する文献が土台とされた事実を提示して貴重である。

第四章「義経入夷説と朝鮮軍記物」では、北海道以北を舞台とした軍記である蝦夷軍記物の諸作品について、当初の冒険譚的な源義経蝦夷征服伝承が、18世紀以降南下するロシアの脅威を背景に、蒙古（ロシアを暗示）の侵略から守るという名目で蝦夷を征服する、更にはロシアの隠喩としての蝦夷を積極的に征伐・鎮圧するという内容に変わって行ったとして、現実の国際情勢が異国征伐戦記の構想に反映した具体的例証を示し、朝鮮軍記物の直接的な影響は見られないものの、征伐の論理は共通することを指摘する。

以上の4章の考察を通して、朝鮮・琉球・蝦夷への武力による侵略を、「征伐」としてどのように正当化したかがさまざまな作品に即して確認され、それを踏まえて結論の章で、各種の異国征伐戦記における征伐を正当化する論理に〈攻撃の論理〉と〈防禦・反撃の論理〉の二つがあり、それに基づいて作品が組み立てられていることが述べられる。これは、異国征伐戦記に通底する論理の指摘として重要である。

扱う文献が多岐にわたりまた多量であるだけに、細部においては異論の余地もありうるし、今後の資料の発掘によって修正を要する可能性も含まれるものの、朝鮮軍記物から蝦夷軍記物に至る諸作品を一括して対象とし、朝鮮軍記物を基軸として琉球軍記物・三韓軍記物へと異国征伐軍記が展開したことを大きく跡付けつつ、複雑に交錯する諸文献間の影響関係を読み解いて、異国征伐の記述の展開と変容についての見通しを示したことは、今後の異国征伐戦記の研究の基礎を作ったものとして高く評価される。

以上より、選考委員会は、金時徳氏を本年度の日本古典文学学術賞の受賞者として選定した。（落合博志）

第35回国際日本文学研究集会 「〈場所〉の記憶—テキストと空間—」 プログラム

平成23年11月26日(土)

総合司会 海野 圭介(国文学研究資料館准教授)

【受付開始】 12:30~

【開会挨拶】今西 祐一郎(国文学研究資料館長) 13:00~

【第1セッション】 13:10~14:10

司会 渡辺 憲司(立教新座中学校・高等学校校長)

研究発表

- ①藤沢と『小栗判官』—長生院における享受と再生—
 糸 汐里(立教大学大学院博士課程)
- ②『西行物語』の方法—東海道を歩む西行—
 蔡 佩青(静岡英和学院大学講師)

【休憩(10分) ポスターセッション】

【第2セッション】 14:20~15:50

司会 戸松 泉(相模女子大学教授)

研究発表

- ③庄司総一「月来香」論—医院、産婆、<1941年>の台湾—
 廖 秀娟(元智大学助教授)
- ④青島の哀歌—澁澤龍彦「画美人」論
 林 淑丹(文藻外語学院副教授)
- ⑤太平洋戦争前後におけるタイ表象イメージの接合と変容
 久保田 裕子(福岡教育大学教授)

【休憩(10分) ポスターセッション】

【ショートセッション】 16:00~18:10

司会 谷川 恵一(国文学研究資料館教授)

- ①「トボス」としての韓国と日本、その戦後の記憶
 —「広場」と「万延元年のフットボール」にみえる「回帰」と「脱出」
 を中心に
 趙 軒求(中央大学大学院博士課程)
- ②「敦煌」に見る井上靖の中国地域像—河西回廊の道標的都市をめぐって
 何 志勇(大連外国語学院講師)
- ③中島敦と南洋
 陸 嬋(東京外国語大学大学院博士課程)
- ④テキストと<境界>の生成
 —太宰治「津軽」におけるチェーホフの影響を中心に
 申 福貞(熊本大学大学院博士課程)

【休憩(10分)】

司会 横井 孝(実践女子大学教授)

- ⑤周作人の日本文化観—1930年代を中心に
 韓 玲姬(筑波大学大学院博士課程)
- ⑥能楽の謡曲における場所の記録に対する舞においての空間表現の仕方
 Buresova Lucie(カレル大学修士課程)
- ⑦禁野交野の記憶—持明院基春と鷹書—
 大坪 舞(立命館大学大学院博士課程)
- ⑧<南山>としての吉野—終南山との関わりを中心に—
 高 兵兵(西北大学教授)

【事務連絡・会場移動】

【レセプション】 18:30~19:30

平成23年11月27日(日)

総合司会 相田 満(国文学研究資料館准教授)

【受付開始】 10:00~

【第3セッション】 10:30~12:00

司会 青田 寿美(国文学研究資料館准教授)

研究発表

- ⑥〈ユートピア〉という場所—村上春樹『スプートニクの恋人』を中心に
 徐 忍宇(九州大学大学院博士課程)
- ⑦津村節子の描く八丈島—「黒い潮」創作ノートの検証—
 岩田 陽子(関西大学大学院博士課程)
- ⑧失われた欲望を求めて:三島由紀夫の『仮面の告白』における記憶の語り
 Keith Vincent(ボストン大学准教授)

【休憩(120分) 昼食・ポスターセッション】

陽明文庫展の見学

【第4セッション】 14:00~15:30

司会 小嶋 菜温子(立教大学教授)

研究発表

- ⑨岡本綺堂の戯曲「お七」と本郷座
 丹羽 みさと(国文学研究資料館機関研究員)
- ⑩『落窪物語』の和歌—法華八講との関連から—
 園山 千里(ヤギェウォ大学准教授)
- ⑪王朝における歌合の空間
 —村上天徳四年内裏歌合を受けとめた後冷泉朝期の歌合—
 赤澤 真理(日本学術振興会特別研究員)

【休憩(10分) ポスターセッション】

【公開講演】 15:40~16:55

江戸戯作における「展示型見立て」
 —開帳・見世物を模倣したイメージの展覧会—
 崔京国(国文学研究資料館外国人研究員)

【総括】 16:55~17:05

【ポスターセッション】

- テキストに潜在する記憶としての異郷
 —歴史棲化する龍宮とその周辺—
 林 晃平(苫小牧駒澤大学教授)
- 俳諧文芸と風土—京と江戸を中心にして—
 西 いおり(京都産業大学研究員)
- 『雨月物語』における離郷する人たちの運命をめぐって
 —儒家思想を背景に
 岳 遠坤(北京外国語大学博士課程)
- 明石君と紫上との協働的關係
 MYERS Michelle(名古屋大学博士課程)
- 上代人にとつての「瀬」—「苦瀬」をめぐる考察—
 高橋 憲子(早稲田大学修士課程)
- 川端康成「禽獣」の時間と空間
 王 薇婷(広島大学博士課程)
- 中島敦「狐憑」論—無文字社会における「記録」
 趙 楊(大阪府立大学博士課程)
- 楽の変遷—辞書の用例から—
 江崎 公子(総合研究大学院大学博士課程・国立音楽大学准教授)

韓国ソウルでの研究交流

7月17～22日の6日間、韓国ソウル市で行われた二つの学術交流会と関連調査について報告いたします。

ひとつは韓国国立中央図書館との研究交流です。国文学研究資料館(以下国文研)と中央図書館の関係は、10年余り前、科研費補助金に基づき、当時の松野陽一館長を代表者とする韓国・中国・台湾・ロシア沿海州残存日本古典籍資料調査(予備段階を経て、正式には平成13～17年度実施)の一環として結びつられ、狭義の「国文学」資料については、その後中断もあったものの、今回の調査で所期の目標を達成することができました。

さらに昨年からは、中央図書館のご提案により、国文研メンバーがこれまで調査した資料の中から善本(広く今後の研究にとって重要と考えられるもの)を選定し、定期的に交流会を開いてオーソライズするという段階に入りました。この交流会は、「日韓古典籍研究交流会」と名づけられ、善本選定の報告ばかりでなく、両国の書誌調査の方法及び古典籍研究の成果について学びあい、意見を交換する場として設定されたものです。

幸い本年度から4年間、新たに科研費を獲得することができ(代表者大高)、「国文学」諸ジャンルに加え、日本語及び和刻本漢籍・日本漢文の専門家によるチームを編成、年に2度の中央図書館における善本選定作業と年1度の交流会を積み重ねて、200点を目途に解題を付し、行く行くは先方のデータベースから公開される予定です。

今回は、昨年に引き続き2回目の交流会を行いました(7月19日、国立中央図書館デジタル図書館大会議室で実施)。中央図書館呂渭淑(ヨ・ウィスク)資料管理部長・国文研今西館長の挨拶に続き、前半は、小林健二研究部教授・林真人総研大院生による日本中世散文文芸・芸能の善本調査報告。休憩をはさみ、後半は講演2本(堀川貴司慶應義塾大学斯道文庫教授「日本古典籍の特徴と日本書誌学」・奉成奇(ボン・ソング)中央図書館図書館研究所古典運営室長「韓国の金属活字」)。いずれも事前に資料・レジュメを整備し、通訳を介してのコミュニケーションでしたが、予定時間を超えて、きわめて活発な質疑応答が行われました。また20・21日は、次回以降の交流会に向けて善本の選定作業を進めました。

もうひとつの研究交流は、中央図書館との交流会の前日(7月18日)に高麗大学校日本研究センターで開催された「SEOUL 発 日本学(国際研究集会 in Seoul)」です。同センターが主管、九州大学韓国研究センター・国文研・高麗大同センターが主催したものです。日韓のみならず中国からも古典籍を中心に日本資料の専門家を招き、第一部「在外和書所在情報セミナー」・第二部「和本リテラシー in Seoul」として、中野三敏九州大学名誉教授の講演をはじめ、午前9時から午後6時まで報告・発表が続きました。会場となった日本研究センター円形講義室は、予備の椅子を多く用意して入場者に対応するなど、満員の盛況でした。国文研からは、寺島恒世研究部教授が発表「新古今和歌集の撰集資料—国文学研究資料館蔵定家筆断簡について—」を行ったほか、国文研研究者が報告・コメント・司会に参加しました。この集会については、ご多忙を押して周到に準備を重ねられた崔官(チュ・グァン)高麗大学校日本研究センター所長と松原孝俊九州大学教授(韓国研究センター長)の労を多し、また両先生の手足として骨身を惜しまれなかった皆様に心から御礼を申し上げます。

なお今回の行事は、国文研と高麗大学校日本研究センターの間で結ばれた交流協定の一環としても意義深いものでした。書物を通じたこのような交流が今後日韓の研究者間に一層広がることを、心から願っております。(大高洋司)



総合研究大学院大学 日本文学研究専攻の近況

中村 康夫 (日本文学研究専攻長)

大学院教育は変わりつつある。かつては自分の専門分野をどこまで極めるかということが大事だった。埋没して研究すればよかった。しかし今は、世の中がどちらを向いてどう進んでいるかを感じながら自分の専門分野を深化させる必要がある。つまり、今は、他人・他分野がどういう研究を進めているかにも関心を持ちながら進まなければならない。大学や情報の多様化もその方向を示している。

総研大日本文学研究専攻では、専攻内の各教員の専門ができるだけ幅広く院生諸君に伝わるように、昨年度から「文学研究基礎論」を開講した。この科目がどう利用され、院生諸君の研究に良い効果をもたらしているかを、一年経った今のタイミングで確認したかった。併せて、吉田さんには院生たちの近況を報告してもらうことにした。

今のところ院生諸君からの報告は好評ばかりに見えるが、さまざまに乗り越えて一人一人の研究の内実に生かしてもらえればと思うばかりである。

日本文学研究専攻 2年 林 真人

日本文学研究専攻で履修できる文学研究基礎論は、週替わりで各先生方の講義を受けられる授業です。この科目の最大の特徴は様々な先生方の専門分野のエッセンスを吸収できることにあります。他の授業科目では、博士課程の学生の専門分野に合わせた授業内容になることが間々ありますが、文学研究基礎論ではそれぞれの先生方が最も得意とする分野について集中的に教わることになるのです。そして、その分野も多彩です。国文学研究資料館には、一般的にイメージされる文学研究者のみならず、芸能・書誌・歴史・情報など、文献を用いる学問の専門家が多数在籍しています。自分の専門分野に閉じこもりがちな博士課程の学生にとって、これらの多様な分野について学ぶことは、教養を広げるきっかけとなるとともに、時には自身の研究の大きなヒントになることもあります。文学研究基礎論は頭の風通しを良くする時間なのです。

日本文学研究専攻 2年 屋代 (高野) 純子

文学研究基礎論は、先生方がリレー式に交代し、ご講義下さる授業です。履修時に印象深かったのは「今、どんな分野を研究していますか?」「今回の授業で、どんなことを学びたいのですか?」と、先生方が受講生に毎回問いかけて下さったことでした。院生の関心領域について知った上で授業を組み立てて下さる細やかなご配慮に感謝しています。また同時にそれは、どんな領域の学問にも主体的な問いを持って学ぶ姿勢が大切だということも教えて頂く機会ともなりました。実際の授業の中では、原典の情報をいかに解析していくか、文学作品への情報学的アプローチにはどのような方法があるか、国際化が進む中で日本文学がどのように翻訳されているかなど、大変興味深く、かつ幅広い研究領域の諸問題について、先生方がご講義下さり、ディスカッションの機会を与えて下さいました。本学に進学した初年度にこうした機会が与えられたことは非常に有意義だったと思います。

日本文学研究専攻 1年 羽田 美紀

「文学研究基礎論」では時代区分や専門領域を異にする様々な先生方が各一回ずつ講義をしてくださった。自分の興味関心に依って授業を選択しては決して触れることがなかった領域の講義を聴くことができたことが、有用であったと思う。いずれの先生方も資料館に保存されている貴重な資料をふんだんに用いて指導して下さい、入学したばかりの私にとっては資料を手取る緊張感と同時に楽しみも実感することができた。

特に印象深かったのは、高橋先生・青木先生・西村先生のアーカイブズ系の講義である。今まで在籍してきた大学ではアーカイブズ学を設置していなかったため、私にとっては未知の学問分野であった。しかし東日本大震災において被災した史料の整理や保存など、被災した人々を救出するのと同じように保存史料を救うために現在進行形で奔走している先生方の活躍を知ることができ、非常に有益な時間であった。

日本文学研究専攻 3年 吉田 小百合

本年度は新入生を二名迎え、院生室はますます活気溢れることと思われたのだが、日を追うごと、日本文学研究専攻の院生室は人の姿がまばらもまばらになっている。国文学研究資料館という、資料も人も豊富な館内に院生室があるにもかかわらず、このような状況であるのを嘆かれる先生方もいるが、研究活動は館内でのみ行われるものではないのではないだろうか。

総研大文化科学研究科では、RT 事業という名称の事業がある。大まかには、院生の研究活動に対して、必要な費用を支援して頂くというものである。院生は、各自この制度を利用し、館外での文献調査や研究内容をまとめ、研究発表を行い、それぞれ研究活動の拡充を図っている。こういった活動に伴い、現在院生室は各自の研究に専念する期間に入っていると行って良い。前学期も終わり、後学期に入ると、博士号取得のための審査のひとつである、中間報告発表が12月に予定されている。本年度の成果報告の前、また院生室は活気を取り戻し、各々の研究経過を報告しながら、その遣り取りを経て、互いに切磋琢磨しながら中間報告に、また、予備審査に臨むことになるだろう。

2011年 11月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

2011年 12月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2012年 1月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

- 開館 9:00～18:00 ● 請求受付 9:30～12:00、13:00～17:00 ● 複写受付 9:30～16:00
- ただし土曜開館日は、
- 開館 9:30～17:00 ● 請求受付 9:30～12:00、13:00～16:00 ● 複写受付 9:30～15:00

緑のカーテンを作りました

今夏の節電対策の取り組みとして、立川総合研究棟の2階大会議室前のホール外のテラスに、緑のカーテンを作りました。この緑のカーテンは立川総合研究棟に所在する当館、極地研・統数研統合事務センターの職員に「緑のカーテンプロジェクト」への参加を呼びかけ、応募のあった有志約30名が6月中旬からワイヤーロープの設置やネット張りの作業を行って作成しました。カーテンの大きさは幅20m×高さ4mで、床にプランターを21個置き、ゴーヤや朝顔などを植えました。これまで、主にプロジェクトに参加した職員が交替で朝夕の水やりを行い、8月までには張ったネットを超える程に弦が伸びるようになりました。来年度も引き続き、節電対策の取り組みとして実施したいと考えています。

表紙絵紹介

『長恨哥の抄』 絵巻、三巻三軸 (当館蔵 請求記号 99-158)

外題は金泥雲霞描き題簽に「長恨哥の抄 絵上(中・下)」と墨書。内題はない。表紙は金・朱・緑・紫の楓散らし模様金欄綴り装。料紙は鳥の子で、松竹・鶴亀・菖蒲など下絵が金泥で施される。料紙裏は金切り箔散らし。紙高は三二・五糎で、字高は約二七・〇糎。挿絵は細密濃彩で、上巻に五図・中巻に四図・下巻に五図が描かれる。吉田幸一氏旧蔵本。

内容は、題名にあるごとく白楽天作『長恨歌』の抄(注釈)を絵巻に仕立てたものだが、実は万治・寛文頃に刊行された絵入り版本の『やうきひ物語』三冊(全十五図)を粉本としている。

表紙に掲げた場面は、中巻の第二図で、安祿山の乱により都を追われた玄宗が、一緒に連れて逃げてきた楊貴妃を高力士によって無理やりに引き離され、悲嘆にくれるところである。

詞書には、「貴妃は玄宗の御衣の下に顔を差し入れて泣き給ふ。帝絶へかね給ひ、朕をまづ殺して後に貴妃をもうしなへかすと歎き仰せらるれども、高力士御車の上に参りて、貴妃のかいなを引きたて行く。玄宗は心消えてもだえむつがり給ふ」とある。

同じような『長恨歌』の抄を絵巻・絵本に仕立てたものとして、大阪大谷大学図書館蔵絵巻三軸など数本が存する。(小林健二)

